

世界勢去不尽理



玉子王子 著

一章 ケツ見せたから玉踏み潰し

佐藤は目を開ける。

手を見た、張りのある若い肌。

「いつ見てもリアルね」

実際の佐藤は三十少し。若いといえば若いし、中年といえば中年。

それが、今認識できる体は一七歳、女子校生だ。

自分にもそういう時代があったことは覚えているが、かなり記憶のかなたである。

今、佐藤は仮想現実の中にいた。

女尊男卑の不可思議な世界、という設定。

大半というか、世界の中で二人をのぞいて全員がAIだ。

人間は彼女と、もう一人。林という男がいる。

外の世界というか、現実の世界では強姦魔。

この中では、外の記憶を制限されてこの中の住人だと思い込み、佐藤が通う高校に通っている。

とりあえず、佐藤は学校へ向かう。

佐藤は監視者、林が仮想現実にいるのは処罰を受けるためだ。

林は外で強姦事件を起こした罰としてここにきている。この女尊男卑の世界に何度も何度も男として生まれ変わり、散々に理不尽去勢を食らうため。

深層心理に女への恐怖を刻み込み、外で二度と強姦などやらないように教育されるために来ている。

佐藤も林も実際の体は寝ており、特殊な装置につながれて仮想現実の中に意識だけ入っている。

仮想現実なので、時間は自由自在。外での一分が百年にでもできる。

林が受ける処罰の時間は、外の時間としては一日だが、彼の主観としては想像を絶するほど長い。

その長い理不尽去勢の時間、彼は基本放置されているが、上手くいっているのか多少は観察されもする。

ずっと付き合うのは観察者にとっても負担が大きすぎるので——外での一時間が主観時間で六千年とかであるから、ただ一緒に過ごすだけで拷問でしかないだろう——点描のように観察する。AIの分析により、そろそろ去勢されるだろうという時期を選んで観察に入る。

今日はその何回目かの観察の二日目。

AIの分析によれば、林とその周辺の者たちのありようから計算して、たぶん一週間以内に林は去勢されるだろうとのことだ。

行く途中、女たちは胸を張り、男たちは伏し目がちだ。数は、女が圧倒的に多い。

と、小学生らしい少女一人が、三人のサラリーマン風の男たちと曲がり角ではち合わせる。

「あ、す、すみません！」

叫ぶサラリーマン。

眉を吊り上げ、口の端で笑う女兒。小学生の中でも年少の方だろう。

「もうちょっとでぶつかりそうだったよ、どうしてくれるの？」

「許してください！」

一人が素早く頭を下げる。

「お兄さんはわかってるねえ。でもあとの二人は」

「すみませんでした！」

「ごめんなさい！」

「遅いよねえ、女だと思って舐めてるんでしょ？」

「そんな……女性のほうが圧倒的に立場が……」

「あは、そうだね。子供でも知ってるよ。か弱い女性には、三つの権利があるってこと。一つ護身去勢権。身を守るために男を去勢してもいい権利。一つ、不快去勢権、女を不快にさせた男は女の気分次第で去勢されちゃうってこと」

「不快なんて元から気分……」

「あ、お兄さん口答え？」

「え、いや」

「はい、去勢けってーい」



「ひ、ひいい」

——い、いやだ、なんでこんな意味の分からない、その辺のガキに去勢なんて……町中にカメラがあって、こいつ殴り倒して逃げても絶対女権警察に追い詰められて、キ○タマがパンパンになるまで蹴りまくられた挙句に去勢される……だから助かるには、こいつに許してもらえない。

その場に膝をつくサラリーマン。

「お、お願いします！ 許してください！」

「あは、土下座？ まあ許してもいいけど……その恰好は違うんじゃない？」

「え？」

「ヒント、去勢されたら無くなるモノを出せばいいんだよ」

「ひ、ひい、こんなところで、裸に？」

真っ青で周りを見る。男たちは足早に去り、女たちがニヤニヤしながら周りで見ている。

「あは、やだあ」

「あんな小学生に男三人が」

「しょうがないよ、男じゃねえ。あんな小さい子でも去勢権は持ってるんだから「はい去勢」って言えばあいつら男終了だもん」

「土下座でも何でもするよねえ」

「っていうか、土下座ぐらいしかできないもんね」

「ね、君、知ってるだろうけど……お小遣いとかもらっちゃだめだよ？ 去勢で脅して何かもらうとか、そういうのは犯罪だから」

「っていうか、それやると男全部わりと瞬く間にホームレスになるだけで、女の方も困るからね」

「タマタマと引き換えなら、こいつらなんでも渡しちゃうだろうから、早いもん勝ちになるしねえ」

「玉ぐらい、いいジャンねえ。っていうかいつそさっさと抜かれちゃえば、去勢の恐怖からは解放されるのにさ」

「で、脱ぐの？」

「脱ぎます！」

「三人ともね」

「え、俺も？」

「あ、不快だなあ」

「脱ぎますっ！ 脱がせて！」

「ださ！」

「あんな小さい子に！」

「玉質取られたら男ってお終いねー」

「まあ男終了よりは、フルチン土下座なんでしょうね」

笑って、興味ないように目を逸らす形をする周りの女たち。しかししっかり凝視している。

上を脱ぐ、鍛えたというか、特に無駄な肉も付いていない体。

スポーツマンで、目の前の女児ぐらい三〇人居ても蹴散らせそうだ。

その体を見て、周りの女たちが華やぐ。

「あらあら」

「あの体だと、期待できるんじゃない？」

「身体検査は運動枠でパスしてそう」

「え、身体検査って？」

「あ、そうか。小学校は五年生で、中高は二年だから、まだ全然知らないんだね」

「うふふ……学校ではね、身体検査で、男の子はここ、検査されるの。おチン〇ン」

「平均以下とみなされたら、去勢されるのよ。平均以下のチン〇ンは存在価値ないもんね」

「きゃー、かわいそう！ それじゃ……あいつとかあいつとか、終わってるじゃん！」



「いやいや、まだ成長の余地あるって、あなたと同じ年なら」

「五年のバイセンで、こんなやついるの！」

指で大きさを示す少女。笑う大人女子。

「あらあ、そりゃ去勢ね」

「まってまって、運動や勉強がある程度できたら、枠で助かるのよ、粗チンでも」

「運動は結構大変なのよね」

「女子との組手だから……あは。嫌われてる子は金的蹴りまくられてそのままの流れで去勢とか良くある話だし」

「テストでもやっぱり嫌われてる奴はいろいろ」

「お、脱いだ脱いだ」

一人は一樣「許された」形だが、油断して「やっぱなーし！」といわれても怖いので同じように脱いでいた。

「きゃ、やだ、やっぱり粋だわ」

「ちっせー」

「三人とも包茎じゃん」

「皮だけの上げ底チ○ポだし」

「っていうか、上げてることにならないでしょこんなん」

「きゃはは、クラスの男子と変わらないよ」

「毛に埋もれて見えませーん。隠そうとしてんじゃね？」

「す、すみません！ 粗チンですいません！」

「ぎゃははは！ 助かろうと必死じゃん！」

「それじゃ、土下座土下座」

横で見ている佐藤は、頬を引きつらせるしかない。

——いやいや、「女尊男卑」ってこういう事じゃないでしょ？ 頭おかしいじゃんこいつら。明らかにおかしいわ。何かこういうふうに行動する構造になってるんじゃない？

AIとはいえ、高度なものだ。本来社会実験用のシミュレーターである。

そのため、「女尊男卑だからそのように振舞え」というような大まかなコードを入れてそれらしく行動させることはできない。記憶を操作したり、特定の状況で特定の行動を選択するように個別に設定する以外は、あくまでも内面は本物の人間と変わらない。

——この人たちの行動は法律とかで動かされたもの……だから、私たちが現実世界で、法律次第でこうなる……はずなんだけど、どうも無理があるのよね。細かいことしらないから、今度聞いてみようかな。

女たちが示す、男への強い加虐性には佐藤が考えている通り法律など以外の理由があった。

外の人間である佐藤は管理している人間に聞けば教えてもらえるが、今までも疑問に思いつつもそれを聞かずに来ているので、たぶんずっと聞かないだろう。

その程度の「不思議」でしかない。どうでもいいのだ、彼女にとっては性犯罪者への刑罰がちゃんと執行されているなら、その背後の構造はなんだっていい。スマホの中身を開けて見ないのと同じだ。

ともかく、今から理不尽去勢が始まろうとしている。去勢されれば、当然そのまま。

佐藤が生きる現実の世界では実はナノテクが発達し、玉竿が破壊されてもすぐ治せる。

こういう仮想現実世界を作るだけの技術がある未来なので当然といえる。

しかしこの仮想現実ではそういったものはない。

二〇二〇年代の日本を模した世界である、「ナノテクが特別発達している」というような設定もない。

というわけで、去勢は一生の事。

絶望である。

その絶望を、大した理由もなく、ほとんど遊び半分でやられつつある男たち。

ニヤニヤと、楽し気な女たち。

それを佐藤は止めない。AIのキャラクターなど助けても仕方ない。

死のうが去勢されようがまた「次の回」では復活し、永劫役割を演じ続けるだけのことなのだ。

というか、別の人間に生まれ変わって永久に生きていくだけ。
どうでもいい、この世界ではよくある光景なのだ。
佐藤は足早に逃げ散る男たちに交じって、さっさと学校に行く。

佐藤という、人間の観察者が去っても悲喜劇は続く。

この仮想世界は本来社会実験用の物なので、プレイヤーが居る所だけで人々が動くような省エネ設計になっていない。

数十億のAIが、与えられた状況の中で生きている。

裸で、女子小学生に土下座するスポーツマンの男たち。

逆らうと去勢、という理不尽な社会に文字通り睾丸を握られ、なすすべ無し。

その中の一人、田村は土下座して青ざめつつ、肉袋が中身を押し潰さんばかりに縮み上がるのを感じていた。

ふんぞり返る女兒。

「あは、謝ったからまあいいや。許すよ」

「あ、ありがとうございます！」

「なんちゃって、嘘！ 許さないよ、去勢！」

「ひいいい！」

「あは、怖い子ねー」

「見てみて、チン玉縮み上がってる、さっきからそうだけど！」

「ていうか生まれつきこんなもんなのかもねえ、この粗チン三兄弟は」

「許してください！」

地面に額を擦り付ける田村。

何の力もない、道理もない女兒。

それでも、その背後には女性優位社会の圧倒的な権力がある。

——クソガキがっ！ 権力をかさに着て……権力さえなきゃ、こんなガキ殴ってレイプして……でも、権力はある……土下座でもなんでもして、玉を守るしかない、玉無しは悲惨、玉無しは地獄、玉無しはお終いだ、すべてが終わる……

震え上がる田村と左右の大人の男二人。

顔を赤らめ、熱い息を吐く女兒。

「はあ、情けないなあー。それでもタマタマ付いてるの？ っていうか、そんなにタマタマ大事？ 取られたくない？」

「取られたくないです！」

「そうかー、それじゃまあ、かわいそうだから許すよ。もういっていいよ。飽きてきたし」

「はい！」

心底安堵する田村たち。恐る恐る立ち上がる。

立ち上がれば、当然股間は丸見え。

縮み上がった男の部分を見て、クスクス笑う周りの女。

一際、田村のモノが小さいが、三人とも毛に埋もれているので序列はつけがたい。

と、女たちの中の一人が手を上げる。

ギャル風の日焼けした金髪少女。

「あ、ちょっと待って。私さあ、こいつらが土下座するとき、ケツ見せられてイラッと来たんだけど」

「え、ちょ」

「まあイラッと来たといっても、大したことないんだけど」

「ありがとうございます！」

「でもまあ、シャレで去勢しとくわ」

「ひいっ！」

「しゃ、しゃれって……シャレで去勢って……や、やめ」

「まって！ 土下座するから……はぐっ！」

「ほい、キーン」

膝で、グチョッと田村の股間を押し潰すギャル。

「ふんぐうううう」

腰を引き、頭を下げる粗チンサラリーマン。その頭がギャルの胸に突っ込む。

「あっ」

「ひっ」

残りの二人が真っ青になる。本人はそれどころではない。

ギャルは笑う。

「あは、いいって。男として最後に触ったオッパイが私とか、光栄だよ。彼氏と別れるときもいつもこうやってキ〇タマ蹴って、オッパイ揉ませて、こうやって倒して」

押して、足を引っかけて倒す。片足をつかんで引き上げ、股の間をブーツで踏む。

「ふぐっ」

優しく、無慈悲に硬い物が股間を押し潰してくるのを感じる。押さえている。まだ踏んでいない。だが、体重をかければ、終わりだと田村にはわかる。

「や、やめ……」

「本当ならタマタマの供養で……というかブチュッと行く感触楽しむために素足がいいんだけど、面倒だから今日は靴のままで。今度潰すときは足でやろうと思う。まあお兄さんには関係ないけどね、今日で両玉死亡だから」

「ひいひい、やめ、やめて……面倒とか、シャレでとか、玉は一生の……」

「私に玉潰された奴は永久に私の男……って勝手に思ってるんだ。だから彼氏と別れるときや、いつも去勢して自分だけのモノにしてるわけ。そんなロマンチストな私にキャン玉潰されるの、お兄さん、光栄に思ってよ。あはは、シャレってのは照れ隠し。本当は体が気に入ったんだ。でもエッチするにはチン棒小さすぎるから……ここは間をとって去勢という理屈。わかるね？」

「いや、そのおお」

——じよ、冗談じゃねえ。わかるといえば踏み潰される。わからないといっても、やっぱ踏み潰しに来るだろこいつ！？ 助かる道ねーじゃん、玉潰される、玉潰される……ケツ見せたから……

汗びっしょりの田村。

横の仲間が叫ぶ。

「わ、わかるかよ！ そんなクソ理屈……あ、ちょ」

叫んだ全裸男。横の別のギャルが肩を叩く。

「こらこら一、女の子様にそんな口聞いていいと思ってんの？」

「お、思ってません！」

「それじゃ、お詫びにキ○タマ差し出しな。片金でいいから」

「そ、そ」

「断ったら両玉潰すからな一。あは、選択肢になってないよね？」

「か、か、片金どうぞ！」

「よーし、それじゃ」

「うん」

もう一人のギャルがにんまりと笑う。

「私、右玉」

「じゃ、私は左玉。一個ずつ！」

「ちょ、ちょ、ちょ」

二人がサッとペンチを取り出す。睾丸圧殺用の二段階ペンチ。

「はいはい、ごめんなさいよっと」

「あ、あ」

右玉の根元を一段階目に挟まれる。それはローラー状になっており、引っ張ると玉を袋の端に追い込める。

本来両玉をやるものだが、二人はよほど慣れているのか器用に片金ずつだ。

「ちょま、ちょま」

「すいません、彼押さえてください」

「え、お、俺？」

「やめろ！ 頼む！」

「嫌ならいいけど、女の子様のお願い断ってキ○タマが無事でいられると思う？」

「ひ、ひい」

「あ、お前、お前っ」

全裸で自分を羽交い絞めにする仲間に目を血走らせる男。が、騒ぐ余裕もない。

「はいはい、玉袋の端に追い込んで」

「みんな見てみて、タマタマ、パンパンだよ、袋も薄くなって血管浮いてるし」

一段階目はローラー状のハサミ、二段階目はカップ状のハサミ。

ペンチの形は工夫され、女性のわずかな力でもしっかり睾丸を押し潰せるものだった。

一息に簡単に潰せる。

しかし、ニヤニヤしながら軽く二段階目で挟んで、今去勢されようとしている男の顔を見るギャル二人。

「それじゃ、いいよね？」

「い、いやだ……助けてっ！ なんでこんなことを！」

「なんでって……」

にやけていたギャルの顔が一瞬強張る。震え上がる男の顔を見る。いや、顔のある方向をみて、目をふらふらと動かす。

何か別のものが見えているかのように。

「んー」

「どうしたの？」

もう一人が首をかしげる。

「いや、別に何も……何だろう」

——今何か見えたような。なんだったんだろう？ 何が見えたの？ 思い出せない……でも、なにか、すごく許せない気分。

「ぐやあああああああああ！」

ブチュ、と、気づくとギャルは手を思いきり握っていた。

「ちょ、ガチ潰しじゃん！」

「ん、ああ、許せない気分だった」

「別に何もされてなくね？」

「あ、そういえばそうだね。それじゃそっちは」

言いつつ、友人がペンチを握る手に、自分の手を添える。

そして、挟むように押える。

「ブチュっと、ほらブチュっと、ブチュっとおおお」

「あ、ちょ、ぎやはは、やめろって……あ」

別に本気で抗うでもない友人。あっさり破裂する最後の睾丸。

「ぎやあああああああああ！」

泡を吹き、白目を剥いてその場に崩れ落ちる男。

小ぶりな一物が反り返る。

ビクビクと小さく震えつつ、白と赤の液体を空しく道路に飛ばす。

見下ろし、半笑いの女たち。

「あーあ、両玉」

「不快だから仕方ないよねえ。でもちょっとかわいそうだったかな？ この経験は次の金潰しに活かされまーす」

「ぎやははは！ それ、この人別に救われねーじゃん！」

言いつつ、ちらっと、仲間を羽交い絞めにした男を見る。

「えーで、あなたですが」

「は、はい」

「お友達が去勢されるってときに、裏切って羽交い絞めとか酷いので去勢しまーす」

「そ、そんな！ お前らのいう事聞いたのに！」

「あ、お前らですってよ」

「やったー、いい口実ゲットゲットゲート」

「あんた前のめり過ぎ！」

「ん、ああ、そうよね。でもなんか許せない気分で……」

「だから別に何もされてなくね？ 男なんて女相手に何もできないよ。なんかしたらすぐチョンかグチョ、だもん。男でいる奴は、女の言いなりのクソチ○ポ君だけ」

「そうなんだけどねえ」

「ひいいい！」

「あ、ちょっと掴まえて！」

「逃がしてくれっ……おぐっ！」

「はいキーン」

「あは、そんなしょぼいのしか付いてなくてもしっかり男なんだ一、金的食らったらもう動けない」

通りすがりの女に金カップをスパンと食らっただけで腰を引き、その場で立ち尽くす男。

瞬く間に囲まれる。

「あ、あ、あ」

「はい、被疑者確保！」

「被疑者って！」

「去勢予定者確保！」

左右から腕を掴み、引っ張る。股間を庇おうとするが、庇いきれない。金的で弱っているし、あまり女の行動に逆らうのは恐ろしかった。

まだ、「許してやる」といってもらえる可能性はある。というより、そもそも去勢する理由自体が無に等しいので、女の気分次第で撤回されるかもしれないという事だ。

希望があるという事自体が、絶望にまともな理由がないことも示している。

ともかく、ニヤニヤと股間を見る女たち。見たいというより、見られて恥ずかしいとか、屈辱だという男の反応を楽しむために見ている。

「ほんとチ○ポちいせー」

「そんなもん取ったほうがいいっしょ？ 元はデカかったって嘘付けるよ」

「っていうか、仲間がタマタマ潰されそうなのに、羽交い絞めとか最低だよねえ」

「キ○タマ潰しちゃえ、キ○タマ潰しちゃえ」

「やだあああああ！ ぐむっ！」

群がる女たち。金カップ、膝蹴り、金パンチと男の急所だけを集中的に狙う。

絶叫の中、もう一人の男。

騒ぎをニヤニヤ見ている女のブーツの下でコロコロと睾丸をなぶられていた。

「あは、盛り上がってるねえ、こっちも負けてられないよ。キ○タマ潰して永遠のカレピッピだっぴ」

「や、やだ……」

「あー？ なに、私の考えおかしいかなあ？ うわ、ムカつくわ。そんなこと言われるなんて。これは玉潰すしかない」

「いや、お、おかしくない！」

「マジ！？ ほんじゃ行きますよー」

「や、やめ……あぐむうううううう！」

ビクン、と体をのけぞらせる田村。

「はい、これで潰れちゃいましたー。見てた？」

小学生に笑いかけるギャル。

「見てました！ やっぱりタマタマは、簡単に潰れるね！」

「あはは、急所潰した男の子は、かわいそうだから慰めてあげないとね。こうするのよ」

いって、サラリーマンの顔面にまたがり、パンツをずらすギャル。

「ほらほら、あんたらの好きなおマンマン。金的蹴られるかもとか、金ちゃん潰されたらどうしようとか、そんな心配一切ない安定した強者の部分。安心安心アンド安心、だってマンマンには余計なボールが付いてないから。コーガンが」

「きゃははは！ でもこのお兄さんも今日から金ちゃんないよ」

「あ、そうだったわね。やったじゃーん、今日から安心村の住人ですよー。二度と金的に怯えない人生。生まれ変わってよかったね」

笑いつつ、声を潜める。自分の股間に話しかけるように、体を丸める。

「でもまあ、キ〇タマない男なんてもう男じゃない以前に人間じゃないからね？ 彼女どころかまともに人間扱いする女もいないでしょうから、そこはわきまえるのよ？ キ〇タマない男なんて家畜だからね」

「ぐふうううう」

泡を吹き、ギャルの雌穴を目の前に見つうめくサラリーマン田村。

——く、く……畜生、畜生、なんでこんな、理由もなく、ケツ見せたって、全裸で土下座しろって言われたから……っていうかそれは理由じゃない、口実だ。こいつらは、玉潰したいから潰すってだけだ。なんで……なんで女どもはこう……憎い……

田村の人生が走馬灯のようによぎる。

物心ついたころから威張り散らしている女子たちにヘコヘコしてきた。

幼稚園の頃から、男子は危険にさらされている。仕事でむしゃくしゃしたからと大人がすれ違いざまに金蹴り、あるいはかわいいからと金蹴り、または理由もなく金蹴り。

暴力沙汰にはならない、女には去勢権がある。

自衛去勢権、不快去勢権、自由去勢権。

自由去勢権があれば他の二つはいらない気もするが、政治的・心理的な必要性がある。要は、実際の間人と変わらないA Iの女たちにバンバン去勢させるための誘導としての意味があるのだ。

去勢の自由だけがあっても、漠然とし過ぎてあまり使われないだろう。

しかし前の二つがあれば「自衛のためなら去勢していいのか」とか「女性を不快にさせるのは去勢相当の罪だ」といった考え方が出てくるわけだ。

そういうわけで、不意の金責めも自由去勢権の行使を途中で止めた形として問題視されない。

当然、周りの女子たちも何かあると男子の玉を蹴る。

田村も小学生に上がる前に周りで何人か、完全に両玉をやられて去勢された友人がいた。

去勢されると、みな引越していく。

お別れ会で保母たちが友人らの去勢された部分を女子らに晒し物にする姿を今でも覚えていた。

小学校でも危険は変わらず、五年生で同級生の女子らによる検査。

そこで田村は自分が小さいと知る。ギリギリ合格だが、中学では無理だろうと女教師に半笑いで言われる。

そこから、必死で運動と女子へのご機嫌取りを行い、なんとか中高の検査を運動枠で突破した。

企業相手の取引をする安定した会社の社員になり、結婚し、娘もできた。

娘のことを考えると、田村は恐ろしかった。

それこそ赤子のころから本能的に急所を攻撃してくるのだ。

彼女も、いずれは、顔の上のギャルのようになるのかと。

体験版終わり

この後、田村、去勢嘲笑ののち、女に転生、今度は去勢する側になり、去勢輪廻は続く。

続きは製品版でぜひお楽しみください